

グーグル切断

— デジタル・メディア社会における「活字」と「綴じること」 —

Googlian Cut : *Types and Binding* in Digital Media Societies

長谷川 一* Hajime Hasegawa

グーグル・プリント

戦端をひらいたのはグーグルだった。2004年12月14日、インターネット検索大手のグーグルは、図書館が所蔵する書籍群の電子化計画を発表した¹。ミシガン、ハーバード、スタンフォード、オックスフォードの各大学図書館に、ニューヨーク公立図書館をくわえた5つの図書館と協力し、それらの蔵書をスキャンするとともに、すでに二か月前の10月に発表されていた「グーグル・プリント」とよばれるサービス上においてテキスト検索を可能にするというものだった²。グーグルの声明によれば、同社の使命は「世界中の情報を組織化し、ひろくアクセス可能にして有用なものたらしめること」にある。しかし残念ながら、今日ここに至ってもまだ大量の有用な情報がオンライン上にあげられていない。書籍、ジャーナルなどといった形式の印刷物がみずから電子化をかたくなに拒んできたからだ。そこでグーグルが立ちあがった——というわけである。この10月時点でグーグルは、出版社にたいしても同プログラムへ参

加をよびかけ、これを「出版社向けグーグル・プリント」(Google Print for Publishers)と称していた。したがって、12月の発表は、グーグル・プリントに新たに「図書館向け」のプログラム (Google Print for Libraries) を追加設定することを意味したのだった。

出版社にとって、グーグルのこの新しい計画は寝耳に水だった。自社刊行物の電子化と公開の工程をグーグルが実質肩代わりしてくれる出版社向けグーグル・プリントは、出版社、とりわけコングロマリットに属さない——ということはしばしば財政的に厳しいことを意味している——学術系の出版社にとってメリットのある提案に映った。だが、図書館向けプログラムでは、図書館蔵書の版元の存在はほとんど無視されていた。そればかりか、その存立そのものを脅かす怖れすらあった。既存の出版産業はこの計画に批判を募らせることになったが、最初の行動に移すまでには6ヶ月を要した。2005年5月20日、アメリカ大学出版部協会 (The

*東京大学大学院情報学環

Association of American University Presses: AAUP) は理事長ピーター・ギヴラー (Peter Givler) の名前でグーグルにたいして質問状を送付した³。内容は16の質問からなり、論点の軸は著作権侵害の可能性を問い合わせどころにあった。すなわち、図書館所蔵の書籍をスキャンして公開するという図書館向けグーグル・プリントは、書籍の版元である出版社の明確な許諾を得ることなく著作権で保護された出版物の電子的な複製を大規模に挙行することを意味している。この行為は著作権の「フェアユース(公正使用)」を謳った著作権法第107条に照らして違法であり、AAUP会員出版社に深刻な財政的ダメージをあたえる怖れがある、というものだ。

グーグルは、著作権保護には細心の注意を払うつもりだとしてかわしたものの、同年8月にはグーグル・プリント・プロジェクトの一時中止に追い込まれた。9月に入ると、作家ギルド (The Authors Guild) が三名の作家とともに、グーグルの計画は厚顔無恥な著作権侵害であることは明白だとしてマンハッタンの連邦裁判所に提訴した⁴。一方、ブッシュ政権は、商務省によるアメリカ国外での著作権侵害にたいする取り締まり強化策を発表した。それは二本の柱からなっていた。ひとつは、著作権侵害行為の懸念される地域——ブラジル、インド、ロシア、タイ、中国、中東——に専門家を派遣して現地での知的所有権保護強化を訴えるというものである。もうひとつは、「国際知的所有権アカデミー」(Global Intellectual Property Rights Academy) と名づけられた機関を設け、上述した各地域の裁判官や警察幹部などをアメリカに

招いて、知的所有権保護やベストプラクティスについて教育するというものだった。

10月。ここまで「グーグル・有力研究図書館連合」対「既存の出版産業」という戦線ですんできたこの戦線に、第三のプレイヤーが参入する。インターネット検索でグーグルとしのぎを削る最大のライバル企業ヤフーである。ヤフーは、オープンソース・ベースのオンライン図書館インターネット・アーカイヴと組んで運営している「オープン・コンテンツ・アライアンス」(Open Content Alliance: OCA)において、全世界の図書館の蔵書を電子化し、それらをウェブ上のすべての検索エンジンで検索可能になるとともに、無料でダウンロード可能にする計画を発表したのだ⁵。この計画がグーグル・プリントを強く意識したものであることは疑いようがない。グーグル・プリントがさらされている批判の焦点を、OCAは最大のセールス・ポイントに転化しているからだ。すなわち著作権の遵守であり、原則として著作権が消滅した書籍のみをスキャンすることを謳っていた。OCAには、カリフォルニア、トロント、コロンビアなどの諸大学はもとより、スマソニアンを筆頭に多数のミュージアムがメンバーとして参加している。そのなかにはヒューレット・パッカード・ラボやアドビ・システムズの名前も見られる。同プロジェクトの技術的基盤は両社から提供されるのだ。

ほどなくして、巨人マイクロソフトがOCA陣営にくわわると発表された⁶。マイクロソフトは2006年から、同社の運営するMSNのサイト上においてMSN ブックサーチ・サービスを開始する予定であり、OCA参加と並行してイギリ

スの大英博物館とも同館所蔵書の電子化プロジェクトを計画している。

同じころ、グーグルはアメリカ出版社協会(The Association of American Publishers: AAP)をバックにした大手出版社5社——マクロウヒル、サイモン&シュスター、ペンギン、ピアソン、ワイリー——からも提訴された(10月19日⁷)。グーグル包囲網は、いよいよ厳しく固められ、その網はじわじわと狭められていった。

11月3日、グーグルはついにグーグル・プリントのベータ版公開に踏みきった。著作権保持者が明確に許可したばあいを除き、著作権が消滅した書籍のみが内容を公開された。ユーザーは、インターネット上でこれら書物の全文を検索することができ、オンライン書店アマゾンへのリンクを経由して、見つけた書籍を購入することもできるというものだった。

そのアマゾンは、グーグル・プリントの公開をうけて、「アマゾン・ページ」(Amazon Pages)とよばれる、書籍一冊まるごと、または一部分を電子的に読むことを可能にする有料プログラムの導入を計画していると発表した⁸。同社はすでに2003年から "Search Inside the Book" という書籍の内容の一部の検索・閲覧機能を提供してきた実績がある。これは日本版アマゾンでは「なか見！検索」という名で実装され、2005年11月からサービスが開始されているものだ。一方、ベルテルスマニ傘下にある世界最大の書籍出版社ランダムハウスは、新しいオンライン・ビジネスの構想を発表した⁹。同社の書籍の購入者がオンライン書店や検索ポータルなどと個別に契約を結び、ユーザーにページ

単位で電子的に有料閲覧を可能にするサービスが提供されるという計画である。

11月17日、ベータ版公開から二週間が経過したにすぎないグーグル・プリントは、その名を「グーグル・ブック・サーチ」とあらためることになった¹⁰。グーグルによれば、改称の理由は技術の進展にある。最初にグーグル・プリント構想を発表したときは、ユーザーが本を探しやすくすることが目標だった。だがいまやグーグルが提供はじめているのは書物のテキスト・アーカイヴである。ユーザーは、書物を全文検索のみならず、目的とする書物を購入したり借りたりすることがどこで可能かという情報も手にいれることができる。この新しいサービスにはそれに相応しい名前が必要だろう。それがグーグル・ブック・サーチなのだ。そしてその目標は、世界中のすべての書物をオンライン上で検索・入手しやすくなることにある。

しかし、いくらグーグルが説明を重ねようとも、既存の出版産業がいだく疑念は拭えなかった。かれらの目には、改称の目的はグーグル・プリントにたいする批判の回避にあるとしか映らなかった。AAUPのサイトではトップページからリンクを貼って特集を組んでいる¹¹。グーグル・ブック・サーチと名前を変えたところで、プロジェクトの内容はグーグル・プリントそのものであり、問題点はなんら解決されていないと糾弾している。AAUP加盟のペンシルヴァニア州立大学出版局は、同局のサイトの声明文にわざわざ「グーグル・プリント・ブック」と注記して、両者の連続性をことさら強調し、警戒心を隠そうとしている¹²。

書籍出版は、いま電子化をめぐる戦場と化し

ている。

グーグル切断——「書物」はいかに「解体」されるか

電子出版あるいは出版の電子化にかんしては、1980年代半ば以降、無数といつていいほどの議論と試行とが積み重ねられてきた¹³。筆者（長谷川）は以前に、とくに英語圏の学術出版に即してその流れを整理し、出版の電子化の根本的な問題について批判的に検討したことがあるので、その委細についてここではくり返さない¹⁴。直接には2004年に端を発したグーグル・プリントをめぐるたたかいを、こうした電子出版の展開の一角に位置づけることは、あながち不当なことではないだろう。しかしこの戦線は、いくつかの点において、それ以前までのものとは決定的に異なる性質をもっているようにおもわれる。この切断線を、いま仮に「グーグル切断」（Googlian Cut）とよんでみたい¹⁵。さしあたり学術・人文書出版に範囲を絞ったうえで、二つの特徴からグーグル切断の様相を腑分けしてみよう。

すぐさま気がつくのは、キープレイヤーの移行である。1980年代から世紀転換期まで、出版の電子化を推しすすめてきた主体は、出版社・図書館・大学・学協会などであった。これらのセクターはいずれも伝統的な冊子体ベースでの学術出版を担ってきた主役たちであり、いわば「嫡子」——正統な継承者——だということができる。だがグーグル切断以後、様相は一変した。いまやキャスティングボードを握るのは、こうした伝統的セクターではない。インターネッ

ト検索やポータルサイトという新興IT企業なのだ。

キープレイヤーのこの移行は、知識流通の主軸となるインフラストラクチャが紙からインターネットへ本格的に移行した帰結であると、一般には受けとめられるかもしれない。メディアを支えるテクノロジーの状況の変化、たとえば、インターネットの急速な普及や、それにともなって影響力を行使しうるメディア企業のパワーバランスが変化した、というようなことは、当然関係しているだろう。けれども、それをいうだけでは、技術中心主義の見方から一步も出るものではない。伝統的な出版主体が、グーグル切断以後、デジタル化の戦場での主導的な地位をインターネット検索の企業にあけわたさなければならなかった理由は、おそらくもう少し複合的であるはずだ。

つぎに目を惹くのは、主戦場の移行である。世紀転換期ごろまでの電子出版の試行と議論は、おもにジャーナル出版、および辞書・事典などのいわゆるレファレンスブック類のなかで争われてきた。ところが、グーグル切断以後の世界でたたかわれているのは、おもに書籍という領域である。

主戦場のこの移行の背景には、ジャーナルやレファレンスブックの電子化にある程度決着がついたという情勢判断が働いていると考えられる。ジャーナルは電子媒体へ移行する過程で、

ときに大学が、またあるときは学協会が主導したこともあったが、最終的には有力ジャーナル出版社を中心とする体制が固められることで、とりあえずの決着を見た。そして、こうした流れに抗って、科学者自身が非営利団体を結成してジャーナルの発行を始めたり、^{ビデオ}研究者どうしによる査読制度をスキップするという、ジャーナルの成立原理そのものを揺さぶるようなオンライン・プリプレス・サーバを実現したりというような対抗的な動きをともないながらも、全体としては、「集中から分散へ」というあらゆる電子テクノロジーについていわれるクリーシェとはまったく逆に、少数の有力出版社による寡占体制へと収斂していったのだ。いっぽうレファレンスブックもまた、その特徴的な性格からデータベースと同義と見なされ、早くから電子化がすすめられてきた。分厚い冊子体でときに数十巻にもおよぶ分量をもつ多数の辞書事典類が電子化された。その大半はCD-ROMなどにパッケージングされた頒布形式をとるか、電子辞書やポータルサイトへのライセンス供与の形をとることで、商品性を担保——早い話が課金する手段の確保——した。なかにはブリタニカのようにインターネット上に独自サイトを設けて原則無償で公開をするとともに、収入は広告で確

保するという経営戦略を採用したところもある。いずれもいろいろと問題をかかえているとはいえ、一定の枠組みが固まりつつあることは否定できない。つまり簡単にいうならば、レファレンスブックとジャーナルという資源にかんしては、すでにデジタル・メディア社会で誰が領有者となるのかがはっきりしているのだ。よそ者が入り込む余地は、もはや大きくはない。

このようにして、書籍という膨大な資産が、既存の出版産業の手によってうまく電子化されることのないまま、いわば手つかずで残されることになった。グーグル切断以後、今日の電子出版の戦場は、既存の出版のなかで最後まで残されたこの資産の領有をめぐって争われている。

こうした状況は全体として、既存の「書物」の「解体」が進行中であることを示している。むろんそんな話はずっと前から、パーソナルコンピュータの普及のなかで語られる文化論の一支流として、くり返し語られてきた。けれども、そうした既往の議論の一部がもっていた目新しい発想や、わくわくするような飛翔感といったような類の想像力は、グーグル切断以後の世界においては微塵も介在していない。そこに通底している感覚は、徹底して冷厳かつ現実的である。グーグル切断最大の特徴は、ここにある。

情報——活字のテクノロジー

グーグル切断以後の世界とは、それまでになかった新しい事柄や事象によってもたらされたものではない。そうではなく、すでに凡庸なままでに氾濫していたものの徹底化によって実現さ

れたモードなのだ。そしてその、凡庸なまでに氾濫していたものとは、書物は「情報」に還元できるとする見方、である。

書物に接することを「教養」と結びつけて考

える伝統的な人文学系の捉え方では、書物について、そこに盛られた「情報」の攝取というよりも、むしろそれに接するという行為自体にこそ人格陶冶に結びつく意味があると考えられてきた。その立場からすれば、グーグル切断とは、まさしく「情報」という工学的な見方による「書物の解体」と映るかもしれない。しかし、こうした即物的な「情報」化の傾向性は、けっして20世紀後半以降の情報科学の発達だけに起因するわけではない。むしろ書物の歴史のなかに、早くから内包されていたものである。とりわけ、さまざまな事柄を集成するレファレンスブックやジャーナルのような定期刊行物といった出版形態の歴史において、それはより顕著である。

レファレンスブックが辞書・事典・年鑑といった類の出版物をさすことは、すでに述べた。そのもっとも象徴的な例をあげれば、18世紀フランスの『百科全書』だろう。もともとは啓蒙主義の記念碑として、一種のユートピアとして同時多発的に構想されていたこの「人間の知識を収集し、人知の全体を一箇所に集めよう」という計画¹⁶が、20年以上をかけて実際に刊行されたことは、啓蒙の時代の記念碑として重要な意味をもつ¹⁶。人知のすべてを集め、並べることによって、世界を把握することを意味したからだった。そのために採用されたのが、知識群を項目ごとに分割して記述し、配列する編集方法だった。しばしば誤解されているように、科学と芸術（技芸）を集成することも、項目別に記述することも、アルファベット順配列をとったことも、『百科全書』の創始というわけではない。しかしこうしたフォーマットを採用した同書が

大きな成功を見たことによって、以後20世紀までのレファレンスブックの歴史が決定的に枠づけられたことは確かだといわねばなるまい。人知のすべてを総合するために案出されたこの形式は、——皮肉なことに、といってよいものかどうか——、もう一方で、『百科全書』を、標準化されたフォーマットの下にもとづく知識の断片のプールと見なすことも可能にしていた。その意味で、もともと「情報」という観点と親和性をもっていた。人知の全体という世界性をめざした書物の形式は、同時に、人知を徹底して断片化していく契機でもあったのだ。

各地に散らばった科学に関心をもつひとびとを結びつけるためのメディアとして成立したジャーナルは、もっぱら自然科学や医学、工学といった、いわゆる理系の諸学問のあいだで発達してきた出版形態である。ジャーナルもまた、19世紀以降、科学の制度化（専門化と職業化）の猛烈な加速にともなって、複数の論考をひとつの器にまとめてひとびとを束ねていくという意味での統一性、世界性を徐々に喪失していく。20世紀になって「科学の体制化」が¹⁷、あるいは「アカデミック科学」から「産業化科学」への転換が進行していくにしたがって¹⁸、「権威ある」ジャーナルに査読を経て掲載されたという品質保証と、誰に先 取権プライオリティがあるかを認定するための「標識」と化すようになっていた。そうであるのなら、それはどう見ても断片化された「情報」なのであって、電子化されたほうがより効率的な運用されるものであるといえるかもしれない。

ひとつ注意を払っておくべきことがある。ここでいう「書物」は、既存の多くの書物論、電

子テキスト論においてそうであったように、一五世紀ヨーロッパに登場した活版印刷術に依拠して生産されてきたものの系譜上にあることが前提されている、ということである。この活版印刷術が、「書物」と「情報」のあいだを結ぶ鍵を握っている。

活版印刷術とは、いうまでもなく、金属その他によって成型された活字を組みあわせて版を組み、そこにインクを塗布、紙や羊皮紙へプレスして、版面を転写する技術のことをさす。活字に用いられる素材はおもに金属であり、鉛・錫・アンチモンによる活字合金はグーテンベルグによって発明されたとされている。これら金属活字は、一文字ずつバラして組み換えることが可能であることから、「ムーヴァブル・タイプ」とよばれる。ルイス・マンフォードによれば、この取外し可能な活字こそ、標準化された互換可能の部品の原型にはかならない¹⁹。大輪盛登は、「ことばを一字一字に分割し、互換可能な規格を与えられた活字は、物をこれ以上分割できない要素にまで分割して量的に把握可能なものとし」たと位置づけ、つまり「活字は近代そのものであり、また近代をつくりだした原基なの」だと述べている²⁰。

このような意味で、取外し可能な活字は、17世紀科学革命の同時代人ライプニッツによる普遍言語（普遍記号学）に起源をもつ「情報」という魔術と出自を共有していると見なすことができる。取外し可能な活字を中核とする活版印刷術は、改良を重ねながらも技術的な原理に決定的な変更がくわえられることなく、15世紀中葉の発明以来じつに5世紀にわたって、息長く

印刷術の中核を担いつづけてきた。そしてその間活版印刷術は、大量の書物を複製して世界中に散布することをとおして、近代社会の準備・発展・成熟といった各段階において、これを下支えしてきた。しかし20世紀後葉に至り、その活版印刷術は、みずからが育んできたはずの近代社会の産物の極北ともいべき電子情報技術の発達にともなって、電算写植やDTP(Desktop Publishing)といったデジタル組版・製版技術が急速に普及するにしたがいその姿を消すことになった。現在では活版印刷術は、名刺など端物印刷のごく一部に例外的に見られるほかは、ほぼ消滅に等しい状態にある。それは一見、歴史の皮肉といいたくなる光景であるが、こうした流れのなかでは、「書物」が「情報」に解体されていくのは当然の帰結とさえ、いえるかもしない。

白い紙に印字された文字列という具体性を失って抽象的なテキストとなった「書物」は、つぎにそれが電子的な記号に置き換えられて、検索エンジンによる操作の対象となるべき形式を与えられ、インターネットに接続されたサーバ上にアクセス可能なデータとして、他のあらゆる事柄と同地平におかれることになる。これがグーグル切断以後の世界における「書物」の「情報」化である。「書物」は検索資源の草刈り場という以上の意味を失い、時代遅れの古ぼけたメディアと化した。それは語るに足るアクチュアルな価値をすっかり失ってしまったかのようだ。多少とも目先の利く者は、「電子の世界」について語る側につくことを好むであろう。

出版社——非商品化する「書物」を前に

既存の出版セクター、なかでも出版社は、グーグル切断によって引き起こされる事態をきわめて深刻にうけとめている。たんに出版物の売れ行きに打撃を与える怖れがあるというだけでなく、出版社の経営的自立性が根こそぎ洗い流されてしまいかねないからだ。90年代までの漠然とした不安感ではなく、ザラッとしたリアルな恐怖である。

グーグル切断より以前には、電子的な出版物は、冊子体の出版物と同様、なんらかのかたちで著者や版元にたいして収益をもたらすものであることが期待されていた。そのことは前提でもあった。出版物は知的生産物と見なされ、知識の所有権（知的財産権）の一種として著作権という概念が構築され、重要視されてきたのである。けれどもグーグル切断以後の世界では、もはや電子書籍それ自体が直接収益を生むかどうかは、あまり重要な問題ではなくなっている。なぜなら、インターネット検索サイトにとっては、そこで提供される情報そのものは直接的に利益を生むものではなく、そうしたことでも期待されなくなっているからだ。そこではむしろ、こうした情報へのアクセス経路を提供することで多数のユーザーをよび、よびこまれたユーザーにたいして提供する広告によって収益をあげる構造が主流になっている。つまり、電子書籍そのものから利益を得ることよりも、書籍を電子的にアクセス可能なかたちにしておくことで、ユーザーにより広範囲な情報を提供しうる「情報」の可能空間をできるだけ拡張して用意し、そのことでもって検索エンジンの広告媒体とし

ての価値を引きあげることのほうが肝要になっているのである。

これまで試行された書物の電子化プロジェクトの多くにおいて、電子書籍は、それ自体が自立性をもち、したがって必要とあればいつでも商品へと転化しうることが暗黙のうちに要求されていた。なぜかといえば、電子書籍とは冊子体の書物の枠組みをそのまま電子的なかたちに置き換え、延長したものであったからだ。つまり既存の出版産業は、電子書籍もまた「書物」であるべきであり、そうであるはずだという考え方方に、さしたる疑いを差しはさまなかったのだ。あるいは、既存の出版セクターにとっては、あまりに自明のことだったのかもしれない。

ところが、グーグル切断以後の世界において、「書物」は「情報」に「解体」された。ここでは、電子書籍であろうがなんであろうが、あらゆることが「情報」という地平に等価に並置されていることがめざされる。検索エンジンの技術を提供するIT企業にとって、それらはいわばより多くのユーザーからのアクセスを呼び込むためであり、そのことをとおしてより多くの広告を呼び集めるためである。アメリカや日本の民間商業放送が、コマーシャルのあいだに番組を流す——むろん一般的にはそれを逆に感じるよう構造化してきたわけだが——のと似ているといえるかもしれない。広告を集めるために、民間放送局はより高い視聴率の獲得できる番組を制作し、グーグルはアクセス数をどしどし増やすべくソフトウェアを開発する——あるいはこうした技術をもつベンチャー企業を買収

し、そして検索情報資源を用意するのだ。グーグルの会長兼CEOエリック・シュミットは自社のことを「世界最大の広告媒体」であると語っている²¹。数百年にわたって蓄積されてきた書籍群は、同時にしねに商品すなわち売り物だった。いまや「書物」は「解体」されるにともなっ

て商品であることを止め、「客寄せ」になりつつある。グーグル切断以後の世界において、「書物」ばかりか、出版行為の経済的自立性もまた、「解体」を迫られているといわねばなるまい。

編集 —— 増殖する「主体の意味」

グーグル切断が出版社にもたらす喪失は、経済的自立性だけではない。これまで出版社にたいして文化的・社会的なステータスを提供してきた淵源もまた失われることになる。それはすなわち「編集」——出版社自身がこれまで好んで用いてきた表現をつかえば、「知のゲートキーパー」や「価値判断」——を独占するという権益にはかならない。

近代の出版産業は、新聞や放送や映画などといったほかの近代マスメディアと基本的には同様に、少数の送り手から多数の受け手への一方的関係という構造のなかで、「編集」という権益を独占的に保持してきた。「編集」とは、個々の情報を取捨選択し、それらをどのようにしてひとつの作品にまとめあげていくという、その水準にかかわっている。いわゆる「情報の組織化」であり、放送でいえば、個々の番組制作というよりむしろ「編成」がこれにあたるだろう。この機能を排他的に握ることは、メディア空間の構成とそこへの出入りを調整する権益を独占することにつながる。このことは、学術出版社にたいして、アカデミック・コミュニティのなかでの権威という文化的・社会的ステータ

スの源となっていた。であるからこそ、学術出版社はくり返しみずからを「知のゲートキーパー」であると強調し、学術出版の電子化にあたっても、「編集」 = 「価値判断」の権益をけっして手放そうとはしなかったのだ。

その「聖域」の解体が、グーグル切断以後の世界においては現実味を帯びてきた。「書物」を断片化するということは、すなわちバラバラにして「カード」にしてしまうことである。それを他のあらゆる情報検索資源と並置して parallel する。情報を検索して取捨選択し、それを組織化していく作業——つまり「編集」は、これまでのように出版社によって囲い込まれるのではなく、検索エンジンのユーザーの手に移ってゆく。いわば、「編集」という権益の、特定のセクターによる独占からの「解放」である。少なくともグーグル側の主張としては。

このように考えるとグーグル切断は、IT技術によって可能になった「市民」のエンパワメントの一環であるというよりも見える。ブログやSNSといったユーザー参加型ITサービスを括っていいう、いわゆる「Web 2.0」の流行のなかに位置づけて理解することもできるかもしれない

い。これらは、市民参加をビジネスに結びつけていく考え方である。学術出版のばあい、学術的な一次情報へ直接アクセス可能な人的範囲を、細分化された個別の専門領域の研究者コミュニティの成員からそれ以外の他領域の研究者、のみならず、インターネットの検索エンジンという性格からして研究者以外の一般の市民へと拡張できうることを含意するだろう。このこと自体は、歓迎すべき変化であるようにおもわれる。一般に専門主義ではコミュニティの内部に向かって閉じていく傾向があるため、コミュニティを外部へ開いていく機能は、既往の学術出版の枠組みのなかではほとんど実現できないからである。

それでは、既存の出版産業によって独占されていた「編集」を「市民」へ解放すること——というグーグル切断のテーゼは、市民のエンパワメントという文脈でうけとめ、諸手を挙げて歓迎すべき性質ものなのだろうか。

小野二郎の言葉を引きたい。書物や活字にかかる論考を残した英文学学者、ウィリアム・モリスに傾倒し超凡の編集者でもあった小野は、簡潔にこう述べている。

昔、世界こそが書物だと考えられた時代があった。逆にその時は具体的な書物が収集され、読まれた。世界を読むために。その次に一冊の本をこそ宇宙としたいという願いが現れた。たとえばマラルメが。しかし、今は宇宙を読むことはできず、書物は宇宙ではなくなった。つまり書物はなくなつて、新聞だけになった。その新聞の切り抜きを、主体的な要求にしたがって編集をし

て形を与えて、宇宙は姿を現しはしない。²²

小野によれば、わたしたちの「書物」には二種類しかない。「世界の書」と「新聞」である。小野のいう「新聞」とは、文字どおりの新聞社の発行する新聞紙ではなく、断片化されたアイテムの同時並置をさしている。「新聞」を構成するアイテムはただ事物について書かれた文章であるにすぎず、世界性にたいする志向性は微塵も含まれていない。小野であれば、今日のもっともすぐれた学術モノグラフ——人文・社会科学系の多くの分野でもっとも重視される学術図書の形式であり、多くのばあい単行本として出版される——であっても、むろん「新聞」だと喝破するだろう。

グーグル切断によって、すでに「新聞」と化していた「書物」は、「切り抜き」の水準にまで「解体」される。文脈から切り離された「切り抜き」は、「主体的な要求にしたがって編集を」施しさえすればいかようにでも姿を変えてみせられる。グーグル切断のテーゼが志向する「編集」の「解放」は、適当なアイテムを拾い集めて「編集をして形を与える」ことを無邪気に諒とする、「主体の意味」の無際限な増殖へと帰結する可能性は、けっして低くはない²³。

じじつ現在の社会においては、「編集」という言葉はインフレーション傾向にある。出版や放送や映画といった、これまでおもに使用されてきたメディア領域のなかだけではなく、これまでまったく馴染みのなかった文脈でもつかわれるようになってきている。たとえば、建築によって都市を編集する、などというように。あ

るいは、社会にあふれる情報のなかからじぶんに必要なものを選択して活用する編集力を養うべきだ、などというように。こうした用法に共通するのは、「編集」を、先行的に存在する事物の組み換え、並べ替えによって新しい意味を構成する行為と捉える見方だといえる。なるほど、そういうふうに「編集」を「二義的な創造行為」として考えていけば、おそらくは高等生物の遂行するほとんどあらゆる行為を「編集」とよぶことすらできるだろう。

けれども、たとえばこうして訳知り顔で語られるような「編集」は、小野の考える「編集」からはもっとも遠いところにあった。かれは言う。

異種のものの間の新しい結合であれ、コンテクストの置き換えであれ、編集行為が統合作用の結果——新しい意味の成立に自足しているなら、たちどころにその「意味」は商品としての自立性の獲得がそのまま支配の道具に転化してしまう。われわれが確保しなければならないのは、新しい意味、新しい世界観ではなくて、意味のあらあらしい発生機野の絶えざる再発見の手段である。²⁵

冊子体——綴じるということ

「書物」を電子時代に移行させる。そのような問題の立て方をしたとき、わたしたちは「書物」を活字すなわち文字列と同義と見なし、それをいかに電子的な記号に置き換えることがで

異なる領域にあるものどうしを結びあわせたり、それまでとは異なる文脈に接合することによって、新たな意味を生みだす。これが通常考えられている「編集」の創造的意義である。いや、社会全体を見渡したとき、「編集」をたんなる「整理」や「処理」としてそこに創造的な意義をほとんど認めない見方のほうが多数だといえるだろう。現状がそうであるのならば、「編集」にかんするこのような理解は、相対的に良質であるとさえいってよいかもしれない。

けれども、そんな水準に「自足」していくはいけない、と小野は忠告する。新しく意味が生成する。そのときわたしたちが真に注目しなければならないのは、新たに成立した「意味」の中身なのではなく、意味が生起してくるその刹那のほうなのだ。したがって、小野の考える「編集」とは、しばしば世間の「名編集者」たちがみずから仕事ぶりについて述べるような、「新しい意味を先取りすること」ではまったくない。そこに意味の立ち現れてしまったことに驚く、その驚きのなかに見出されるものこそ、「編集」とよばざるをえない何かだろう。

であるのなら、わたしたちは「書物」を、「意味」としてではなく、契機としてとらえていく必要がある。

きるか、という枠組みのなかに内向していくことになる。現にいまわたしたちは、この磁場のなかにとらえられて見通しが利かなくなり、ほとんど思考停止状態にある。

先に述べたように、こうした考え方の前提となっているのは、「書物」を活版印刷術以後の系譜の中でとらえる視点だった。その活版印刷術を象徴したのが、活字である。活字は、たんに文字の形に铸造された金属棒というだけなく、標準化された互換性をもつ機械部品の原型であり、合理的思考の原型として近代のひな形をなした。その意味で、活字は「書物」と「情報」の同根性をよくあらわしていた。この視点が、グーグル切断以後の世界に顕著であるような、「書物」の断片化による「解体」を促進する底流をなしたのだった。

しかし、活字は「書物」の一面にすぎない。「書物」の成立に不可欠な要素は、活字ばかりではない。紙もある。インクもある。とりわけここで注目したいのは、活字よりもずっと古く、また電算写植やDTPが活版印刷術を駆逐した今日でもなお現役として生きながらえている技術である。すなわちそれは製本、「綴じること」だ。

同じサイズの紙を複数枚束ねて、その一辺を綴じる。これが製本である。糸、金具、接着剤などを用いるなど綴じ方は多様だし、紙も一枚ものではなく、あらかじめ8ないし16ページをまとめて大きな紙に印刷して製作した折丁を重ねるなど、さまざまな方法がある。しかし、ここで重要なのは、こうした個別の技術的事柄というよりも、「書物」が「綴じること」によって成立することである。綴じられた「書物」の形態を「冊子体」とよぶ。そしてこの冊子体という形状は、「書物」に始まりと終わりをもつひとつのまとまりとしての範囲を与えることと、冊子体を構成する同サイズの紙は、そこにある

一貫した秩序を与えることを担保したからである。かつて、「書物」が「世界の書」すなわち世界認識の形式たりえたのは、まさにこの冊子体の形状による。

近代の「書物」とは、活字を用いた活版印刷術によって成り立つものであると同時に、「綴じること」で成立する冊子体でもあった。しかし、出版の電子化をめぐる議論において、「書物」が「綴じること」で成立しているという素朴な事実にたいして、どれほど関心が払われてきただろうか。それはせいぜい、順番にページを繰っていく冊子体の読書が、直線的な思考をもたらした、という程度の議論であり、ハイパーテクストによってその拘束を突き破るという勇ましい話ぐらいではなかったか。

「綴じること」の視点の欠落は、既存の出版セクターが試みた幾多の学術書籍——ジャーナルではなく——電子化プロジェクトが、けっきょくのところ明確な成功を手にすることにできなかつたこととも深く関係している。

学術書籍の典型的な形式といえば、先述のとおりモノグラフであろう。モノグラフとは主として人文系・社会科学系の研究者が著す研究書の一タイプである。多くのばあい、ひとつのテーマにかんする数年がかりの研究をまとめたものであり、相対的にページは厚く、その記述は、内容的に文体の面においても、さまざまな意味で執筆した研究者当人に深く依存している。誤解を恐れずにいえば、それは小説やマンガや絵画や批評や映画が一般にそう信じられているのと同じような意味で、「作品」にほかならない。それは、「読み始め、しかも読み終えることができる有限の言葉からなっている」²⁶。こ

の有限性はどのように担保されているのか。それは、「書物」が「綴じる」ことによって成立していたのではなかったか²⁷。

既存の出版社セクターは、書籍の電子化の試みにさいして、あまりに自明すぎたのか、その「作品性」の磁場を十分対象化することができなかった。たとえば、AAUPとACLS (The American Council of Learned Societies) が共同して推進してきたヒストリー・Eブック・プロジェクト (History E-Book) は、「デジタル時代にふさわしいモノグラフ」——小野の言葉でいえば「新しい意味」そのものにはかならない——を実現することを目的に謳ったものだった²⁸。プロジェクトはとりあえず進展してはいるが、その成果として提出されるものは、つまるところ電子化されたテキスト——たんに文字列といったほうが相応しかろう——のアーカイヴというデータベースにすぎない。そうであるのならば、実際問題すでに数え切れないほどの先行事例があり、新奇性が見出せるものではない。「デジタル時代にふさわしいモノグラフ」の新しい形にかんして、なにか新しい地平を切り拓くことができたと認定するためには、無知と蛮勇とが不可欠である。

わたしたちはここでも、デジタル時代にふさわしい「書物以後の書物」——「ポスト・ブック」とでもよぶことにしようか——として提示

されるものを見せられるたびに、わたし自身がいかに「書物」から不自由であるかを思い知らされることになる。もしデジタル時代にふさわしいモノグラフをつくるのであるならば、今日の学問のあり方や大学をはじめとする知識の生産流通管理にかんする諸制度などをすべて視野に入れておく構想力と覚悟が不可欠であるはずだ。しかし出版社や学協会など既存の出版セクターにとっては、電子化に積極的に取り組むこととは、既存の出版と学問の共存関係をできるだけ温存するか、逆にみずから立場をより強化するための機会として理解していた。そして、デジタル・メディアに姿を変えた「書物以後の書物」も、冊子体時代の「書物」とのあいだにメディアのレベルで連続性が維持されるべきであり、その連続性を担保するものは、あくまで活字なのだと考えたのだった。

このように、既往の電子出版の議論において、「書物」が「綴じること」で成立したものであることは、ほとんど視野に入れられてはこなかった。そこでは、そのテキストがいかにして始まりと終わりをもっていたのかは、自明のこととして顧みられることはなかった。「綴じること」が担ってきた機能は、いかなる意味においても、いまだ電子の世界に継承されてはいない。このことを、グーグル切断以後の世界において、わたしたちはどう考えていくべきなのだろうか。

「出版」の「再発明」へ

これまでわたしたちがおこなってきたのは、電子化された書物がどれほど「書物」であるか

否かの測定にほかならない。そこで基準は「書物」にある。そのときの「書物」とは、「書

物」のなかから活字という要素のみを前景化した見方だった。だから、このような見方にたいして、「書物」が「綴じること」によって成立する事実に注目するとしても、物理的な事物としての「書物」の冊子体性を電子的に再現する、あるいは電子メディア上で発展させる、という水準でとらえるだけでは、「新しい意味」の生成に「自足」することへと回収されていってしまうことは言を俟たない。

だが、小野二郎の示唆を経由したわたしたちは、「書物」をそれ自体の意味においてではなく、契機としてとらえていこうとしている。ゲル切斷以後の世界においてわたしたちが探究すべきなのは、電子化時代にふさわしい「書物」という「新しい意味、新しい世界観」を手にして「自足」することではないからだ。そうではなく、この徹底して殺伐とした時代において、新しい「書物」がその意味を「あらあらしく生起させうる」のだとしたら、その「発生機野」をあらためて見出し、構成していくことが必要とされている。そのことを、わたしたちがよく知っている別の言葉でいうならば、「出版」

(Publishing) であるはずだ。

「出版」は、「書物」の内側ではなく、それを成り立たせている外部——「書物」がいかにして書かれ、編まれ、手わたされ、読まれ、語られるかという、その水準にある。メディアを、それ自体の内包において探究するというよりも、それが埋めこまれている活動の場、コミュニケーションの場のひろがりから、捉え返していくことのなかに見出される。したがって、いわゆる出版産業や、そこでおこなわれている諸活動ではなく、もちろん、いまあるのとは異なる出版産業を捏造することでもない。あるものがいかに「書物」であるかではなく、今日いかにして「出版」が構成可能であるかを問うていくこと。それは「出版」を理論化していくことと言い換えてもよい。「出版」がいま一度「発明」されるという言明が可能なのだとしたら、それはそのような意味においてである。「書物」がそのための契機となりうるのだとしたら、そのための支点は、たとえば「綴じること」という視座によって提供されるだろう。

註

- 1 "All booked up," in *Official Google Blog*, December 14, 2004.
[<http://googleblog.blogspot.com/archives/2004_12_01_gooogleblog_archive.html>](http://googleblog.blogspot.com/archives/2004_12_01_gooogleblog_archive.html)
なお本節は、CNET News, Hotwiredなどの英語版・日本語版記事も適宜参照している。
- 2 "Bookmark this site," in *ibid.*, October 6, 2004.
[<http://googleblog.blogspot.com/2004/10/bookmark-this-site.html>](http://googleblog.blogspot.com/2004/10/bookmark-this-site.html)
- 3 <http://aaupnet.org/aboutup/issues/0865_001.pdf>; "Google Book Search, nee Google Print," in AAUP Website. <<http://aaupnet.org/aboutup/issues/gprint.html>>
- 4 "Authors Guild Sues Google, Citing "Massive Copyright Infringement"," in *Authors Guild Press Release*, September 20, 2005.
[<http://www.authorsguild.org/news/sues_google_citing.htm>](http://www.authorsguild.org/news/sues_google_citing.htm)
- 5 OCA <<http://www.opencontentalliance.org>>。OCAにかんする各メディアの記事については、同サイトからリンクが貼られている（ただしリンク切れも少なくない）。たとえば以下。

- "Yahoo begins effort to bring books online for reading," in *USA TODAY*, October 3, 2005.
<http://www.usatoday.com/tech/products/services/2005-10-3-yahoo-book-project_x.htm>
- 6 "Microsoft to offer book search," in *CNET News*, October 25, 2005.
<http://news.com.com/MicrosoftQ+to+offer+book+search/2100-1025_3-5913711.html>
- 7 "Publishers Sue Google Over Plans to Digitize Books," in *AAP Press Release*, October 19, 2005.
<<http://www.publishers.org/press/releases.cfm?PressReleaseArticleID=292>>
- 8 "Amazon.com Announces Plans for Innovative Digital Book Programs That Will Enable Customers to Purchase Online Access to Any Page, Section, or Chapter of a Book, as Well as the Book in Its Entirety," in *Amazon.com News Release*, November 3, 2005.
<<http://phx.corporate-ir.net/phoenix.zhtml?c=176060&p=irol-newsArticle&ID=778248&highlight=>>
- 9 "Random House, Inc. Announces Business Model for Online Viewing of Books," in *Random House, Inc. Company News*, November 3, 2005.
<<http://www.randomhouse.com/trade/publicity/pdfs/OnlineViewingRH1.pdf>> なおランダムハウスは2000年にいちはやく電子出版計画(atRandom)を立ちあげたものの、その後中止している。
- 10 "Judging Book Search by its cover,' in *Official Google Blog*, November 17, 2005.
<<http://googleblog.blogspot.com/2005/11/judging-book-search-by-its-cover.html>>
- 11 AAUP, *op.cit.*.
- 12 <http://www.psypress.org/news/news_google.html>
- 13 「電子化」と「デジタル化」の用語は本来重なりながらも別の意味を指し示しており、概念としても十分に整理して慎重につかいわける必要がある。しかしその基準に説得的な根拠を見出そうとする作業は、想像するよりもずっと困難なものである。前節で引用・言及した英語文献の多くは "digitalization" の語を使用しているので、素直に訳せば「デジタル化」とすべきところだろう。だが本稿では、デジタル化の意味あいも含めて、原則として「電子化」の用語を使用する。「電子出版」や「電子図書館」などといった、すでに一定いど定着した邦訳語と整合をとることがその大きな理由であり、それ以上でもそれ以下でもない。
- 14 拙著『出版と知のメディア論——エディターシップの歴史と再生』みすず書房、2003年、とくに第3章。および拙著「学術情報の流通とインターネット」『英語青年』2005年1月号（総号1871号）、研究社、2005年1月、14-16頁。なお逐一参照する煩雑は避けるものの、これら拙著の議論は本稿における議論の前提をなしている。
- 15 筆者によるこの造語は、主体（観測者）と客体（対象）の分離を唱えて近代科学の前提を用意した、いわゆる「デカルト切斷」（Cartesian Cut）を踏まえたものである。
- 16 フランコ・ヴェントゥール『百科全書の起源』（叢書・ユニベルシタス）、大津真作訳、法政大学出版局、1946=1979年、2頁。
- 17 廣重徹『科学の社会学』中央公論社、1973年。
- 18 ジェローム・ラヴェッツ『批判的科学——産業化科学の批判のために』中山茂ほか訳、秀潤社、1971=1977年。
- 19 ルイス・マンフォード『ユートピアの系譜——理想の都市とは何か』関裕三郎訳、新泉社、1922=1971年。今日のブログ用ソフトウェアのひとつに「ムーヴァブル・タイプ」という名が与えられているのは、必ずしも偶然とはいえないかもしれない。
- 20 大輪盛登『メディア伝説——活字を生きた人びと』時事通信社、1982年、「まえがき」、8頁。なお同書は不明の理由により「まえがき」にノンブルが打たれていない。ここで記した頁数は「まえがき」の題名のある頁より勘定して仮に記したものである。
- 21 「グーグルは世界最大の広告媒体——シュミット会長が来日講演」、CNET Japan 2005年10月25日。
<<http://japan.cnet.com/news/media/story/0,2000047715,20089587,00.htm>>
- 22 小野二郎「住み手の要求の自己解体こそ」、『書物の宇宙——小野二郎著作集2』晶文社、1986年、437-443頁（引用は442頁）。

- 23 小野二郎「今日の「世界の書」所有形式」、小野、前掲書所収、15-22頁。
- 24 編集を二義的な創造行為と位置づけるのは、外山滋比古が『エディターシップ』(みすず書房、1975年) のなかで示す見方である。
- 25 小野二郎「出版行為の原理を問う —— 編集組織論のために」、小野、前掲書所収、211-216頁（引用は214-215頁）。
- 26 蓮實重彦『表層批評宣言』(ちくま文庫) 筑摩書房、1985年、51頁。
- 27 「どんな本でも、著者には全体として一つの構想というものがあって、それによって一冊の本をまとめているのである。各部分は、全体のなかでそれぞれしかるべき位置におかれることによって、意味をもっているのである。その構想、その文脈は、全部を読むことによって、はじめて理解できる性質のものである。」梅棹忠夫『知的生産の技術』(岩波新書) 岩波書店、1969年、101頁。
- 28 <<http://www.historyebook.org/>>



長谷川 一 (はせがわ はじめ)

1966年生まれ。東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得満期退学

〔専攻領域〕メディア論、出版論、コミュニケーション・デザイン論

〔著書・論文〕

『出版と知のメディア論』みすず書房、2003年

『メディア・プラクティス』共著、せりか書房、2003年

『メディアリテラシーの道具箱』共著、東京大学出版会、2005年

〔所属〕

東京大学大学院情報学環
日本マス・コミュニケーション学会、日本出版学会